

## 研究会・シンポジウム報告

2018年9月15日（土） 公開研究会報告

テーマ： 戦中史から国体論へ——現代日本の古層

報告者： 恒木健太郎所員（経済学部准教授）

『戦中史』と『国体論』を貫くもの」

福井紳一（駿台予備学校講師）

『戦中史』の著者として」

白井聡（京都精華大学人文学部専任講師）

『国体論』の著者として」

時間： 14:00-17:45

場所： 専修大学神田キャンパス5号館542教室

参加者数：27名

報告内容概略：

戦前から戦後へと陸続する日本近現代史の「型」を問うような二つの著作——福井紳一『戦中史』（角川書店）と白井聡『国体論』（集英社新書）——を取りあげ、その中に貫徹する山田盛太郎のごとき「日本資本主義」（＝封建的絶対主義）認識を読みとりつつ、学術界のなかでもはや実証に耐えられぬものとして葬り去られたかに見えていた「講座派」的議論から批判的に継承されるべき論点について、恒木による提題報告、福井および白井の応答報告（リプライ）に基づき、フロアからの質問も交えて討議を行なった。

討論では①戦後改革とアメリカの対外戦略との関係、②天皇制の歴史的経緯とこれをめぐる論争のアポリア、③トランスナショナルな視座と政治的实践との関係、④日本における変革主体の成立可能性、等についてフロアからの質問を交えつつ熱のこもった討議が展開された。とりわけ、戦前の北一輝や左翼アジア主義におけるトランスナショナルな視座を強調しつつ現今の排外主義への対抗軸を提示する福井氏の徹底した姿勢と、日本の天皇制をめぐる戦後の左派の批判および保守の擁護論の無効を「永続敗戦」の観点から主張した白井氏の論調が印象に残る研究会となった。

記：専修大学経済学部・恒木健太郎